

くらし

備える



子どもの命を守るために、さまざまな対策が必要となる。(写真はイメージ)

子どもの命 どう守る? 専門家に聞く

発達段階に応じ工夫を

保育士資格を持つ日本大(東京)危機管理学部の鈴木秀洋准教授(危機管理行政法)は、安全管理のためには細やかな確認作業を積み重ねる必要があるといふ。マニホールドはチェックする人によって受け止め方が異なる場合があり、センサーなどの装置は切り替え時や点検時のエラーやが起り得る。「本末、子どもの自助を強調すべきではない。しかし安全管理に100%はないため、公助・共助といった

今月、静岡県牧之原市の認定こども園で3歳児が通園バスに乗り去りにされ、熱中症で亡くなった。万が一のときに命を守るためにどのようなことを伝えなければならないのか。危機管理と幼児教育の専門家に聞いた。

静岡・バス園児置き去り死



秋田大の山名教授



日本大の鈴木准教授

乗降時シールで確認/ホイッスルでSOS

自局のための対策を進めざるを得ない」
具合策として鈴木准教授が提案するのは、遊びの要素を取り入れて子どもに責任感を持たせる方法。バス出発時や降りる際に座席や席の子に譲る(前後)の席の子ども同士が必要あいさつする。乗車時に書類シールを貼り貼り、離れる際には回収する「手とお預け車掌」を毎回任命する「ななだ」。発達段階に応じた工夫が大切といい。5歳児程度であれば、5歳児程度であれども、開いている窓からハンドカラーリングのが難しくかわいいにしており、状況把握は時間かかる。秋田大教育文化学部の山名裕介教授(幼児教育)は、「私がバスに乗るときは『本人が眠つてるので運転性が高い』とか『運転手が運転がちがう』などと教えるのが、運転にあたって子供が落とすのではなくて『乗せない』と教えるのだ。運転の運びがいろいろな経験をさせてほしい」と語る。たゞ、書類は「物を落とすのではなくて『乗せない』と教えるのだ。田舎の運びがいろいろな経験をさせてほしい」と語る。

2人が協調するのは、子ども自身に対策を伝えるのはあくまで命のために手段というらしい。鈴木准教授は「命を守るには複数の大人的自己意識、労力が必要。それを全ての方法を覚えておくのが一つの手段とする。例として、窓を開けた車内にホイッスルを置いておく方法を考案する。職員が普段座っている席の近く

(石塚陽子)

に、子どもの回数の高さで複数かけておく。赤や黄といった目立つ色がない」と話す。「怖い」という言葉は、意見にも山名教授は「『怖い』と思つたら吹ふんだよ」くらいのシンプルな言葉がない」と語る。年齢が上がれば「バスに閉じ込められたとき」と具体的に説明しても分かる。

クラクションを鳴らす方法は「5歳児は運転席まで

たり着くのが難しくか

わしい」。その点、

も3歳児は運転席まで

いる。山名教授は「乗上

するばかりではなく、田

舎の運びがいろいろな経

験をさせてほしい」と語

る。